

九月二十四日

昨日は、お彼岸の休日だった。終日坂田明の「赤とんぼ」を聴きながらのドローイングに明け暮れた。大判一点、中判一点を製作できた。こういう暮らしも良いが、これはこれなりに自身との対面を続けなければならぬので、仲々にしんどいものがある。描きたいものがあるうちは良いが、失くなった時の空白感は凄まじいだろう。

今度の展覧会に際して描いた銅版画、ドローイングの自分なりの特質を考えるに、建築からの自由って事だったのではなからうか。六〇才になって、何かと不自由になってる自分を感じていた。自由とは自堕落とは異なる。放埒とも異なる。身体の不可能性からの離脱への希求のことだ。その為には何よりも自身の気持ちの中に深く降下していく必要がある。自分を動かしている核を解らずして、自身からの解放はありえない。

都バスの運転手が新宿西口に到着して客を皆降ろして後、車内を念入りに点検するようになって久しい。〇一年の九・一テロを他人事でなく感じる一瞬だ。十時半研究室。十五時半迄忍田邸打合わせ。室内展開図の大半を押さえる。集中したので五時間がいいところだった。十六時半青山、ときの忘れものギャラリー。ナイトスタディーハウスの催し始まる。ギャラリーでチョットとこあいさつをして、タクシーで西早稲田の観音寺へ。三〇人位の人が集まった。十八時話し始める。四十分程で切り上げ皆さんからの

質問その他いただき、できる限り答える。十九時四〇分修了。綿貫さん、豊島北教会の芳賀牧師さん達と近くのレストランで会食。二十二時過修了。皆と別れタクシーで新宿へ。二十三時過世田谷村に戻る。

九月二十五日

朝、松崎町役場の森町長公室長に電話。今日は伊豆の長八美術館二〇周年記念の会があるのだが出席できぬかも知れぬ旨をお伝える。淡路島の山田脩二に電話、彼がもしや松崎町に行っているかも知れぬと危惧しての事。幸い山田は東京の明大前に居た。これから研究室に出ていくつかの雑用を片付けねばならない。十一時研究室。図面チェック他。

夕方、ときの忘れものギャラリーへの案内状送付先について太田とミーティングをする。何せペインターとしての展覧会は初めての事なので、どの当たりの人に招待状を出したら良いのかつかみかねているが、努力してみよう。二〇時修了。世田谷村に戻るも、一人であつた。

九月二十六日 日曜日

九時、世田谷村発、芳賀牧師を訪ねる為、東長崎の教会へ向かう。十時十五分豊島北教会。住宅街の中の小さな教会で威圧的でなく好ましいたたずまいである。芳賀牧師が教会前に立って迎えてさる。来訪者には皆そうしているようだ。十時三〇分、日曜日の聖集会はじまる。十一時四十五分修了。芳賀牧師に皆さんに紹介される。長老の方にお目にかかるなどして十二時過までお茶をいただき、帰途につく。只今、十二時五〇分山の手線高田馬場駅通過。新宿で昼食をとり、十四時世田谷に戻る。小林秀雄「ピカ

ソ」読む。模倣と抽象について、随分深い考えを持っていた事を知る。若い頃、読んでもわからなかった。やっぱり大変な人なんだ。

九月二十七日

朝、ときの忘れものの為にひと働き。十一時半世田谷村発。十三時新木場、現場定例会。トモ社長、専務等と。十六時過修了。杭打ちは全て修了。大学へ。

十七時過研究室。ドイツよりJ・グライター特別講義の為来日。十七時半李祖原、J・グライター連続講義、稲門建築会主催。二人の講義は好対照を示していた。この開きの中に現代建築が抱える幾つかの重要な問題がある。J・グライターが何故、講義の主題を劇場にしたのか、アンドレ・バラディオからリチャード・ワーグナーに来て少し解った。ワーグナーとニーチェの関係は実に濃密で、又、激烈な相反を招くものでもあったのは良く知られるが、ニーチェ研究を介してワーグナーに接近したんだらう。パリのオペラ座とバイロイトのワーグナーの劇場を比較して、アナキストとしてのワーグナーのシアターの性格を浮彫りにしようとしている。次は、ワルター・グロピウスのトータル・シアター。世界観の反映としての劇場の小史を開陳している。一九二七年のシアタークラス at バウハウス。これ以降のシアターは劇場のタイポロジーとしては歴史に逆行、退行しているというのが彼の意見。次にヨルン・ウツツォンのシドニーオペラハウス。次がハンス・シャルーンのプロジェクト。フランク・O・ゲーリーのデイズニールホール。二〇時四五分修了。二十一時過、高田馬場地中海料理文隆にて二人と夕食。二十三時前修了。二十四時前世田谷村に戻る。

九月二十八日

ワーグナーのバイロイトのオペラハウスの外見上のみにくさは機能主義の原点であったかも知れない。オペラを楽しむ単一的機能を純粹に追うというよりも劇場を一つの楽器として想像する。幕間にロビーやらでシャンパンやワインを楽しみ、着飾ったそれそれを見せ合う楽しみは捨てる。そういう割り切り方がバウハウス流の機能主義の始原であった。

李祖原の超大型建築の本来的な価値は、その単一機能追求とは様相を異にする。力なんだろうと憶測しているが、まだ良く解らない。それ以外の意味は地球規模ではあり得ない。

十一時研究室。李祖原の中国大陸での仕事の現実を聞く。聞きしに勝る、ほとんど死闘だな。それでも、北京オリンピックの主会場横のモルガン財閥の超高層及びコンプレックスを獲るのだから、異常とも思える力である。ミルクにサンドイッチの昼食をとりながら雑用に次ぐ雑用、十六時四十五分、研究室発。十七時二〇分新宿。聖跡桜ヶ丘へ、近藤理事長、島倉二千六氏、西山社長と会食。